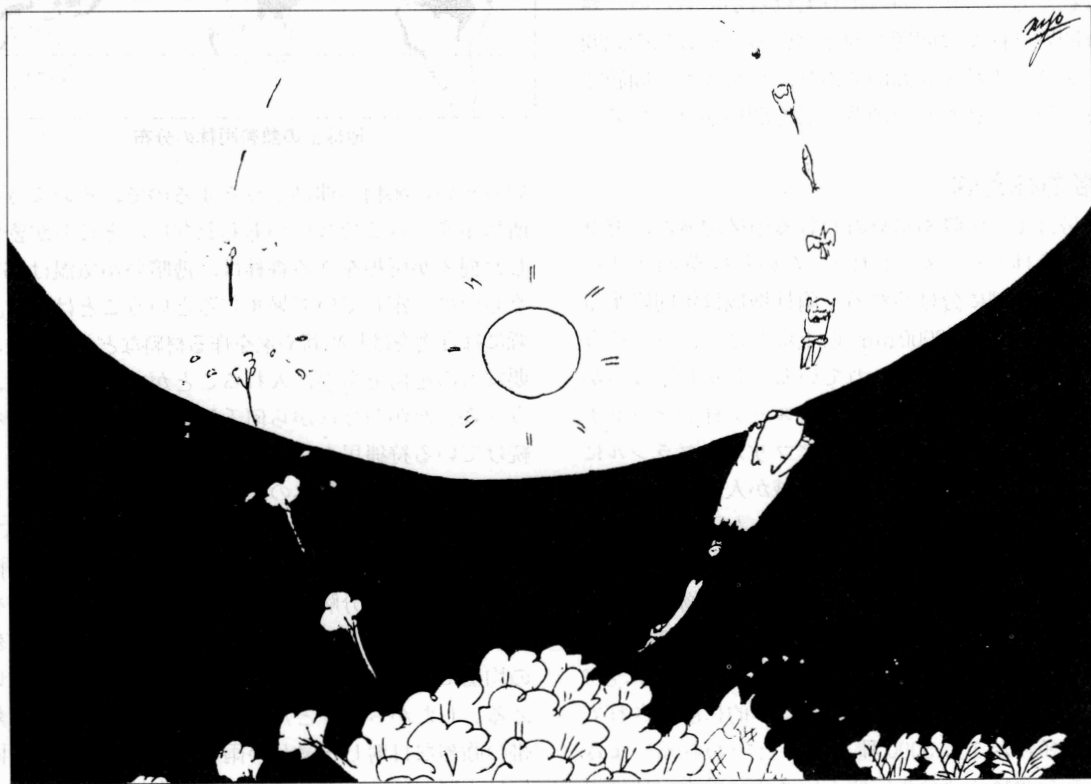


トリアル・アンド・エラー
Trial & Error No.70
試 行 錯 誤



小鳥も動物もいなくなってしまうんだ。

特集 熱帯雨林のはなし

| | |
|--------------------------------|----|
| 熱帯雨林のはなし | 2 |
| 講演「アジアの森と人々」 | 8 |
| 新木場を訪ねて | 10 |
| 行動する自然保護グループ 熱帯林行動ネットワーク | 12 |
| JVCと熱帯林問題 | 13 |
| 深夜の山谷を歩く——山谷見学会 | 14 |
| 援助の裏側で | 16 |
| My Dear Friend | 18 |
| ソマリアの日々④ | 19 |
| JVCNEWS | 20 |

熱帯雨林のはなし

森林保護と私たちの暮らし

はじめに

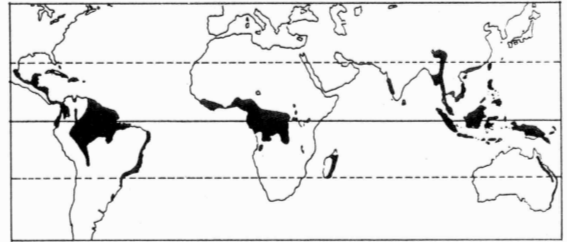
6000万年の歴史を持つ熱帯雨林は今もなお生物の進化が展開されている。しかしそこに踏みこんだ人類は既にその2分の1を消してしまった。熱帯雨林は私たちが考えているよりもはるかにもろい。熱帯林問題は様々な問題を抱えている。それは南北問題であり、少数民族問題であり、エネルギー問題であり、何より私たちの消費生活を問いかけている。

熱帯雨林とは

熱帯は1年中降雨に見舞われる雨林地域と、乾季を持つ森林(モンスーン林)、ないしは草原(サバンナ)の地域に分けられる。雨林地域は年間降水量が1600mmから3000mm以上に達し、うっそうとした広葉常緑樹に覆われている。しかし干ばつが長びいたり、雨が少ないとモンスーン林やサバンナ、やがては砂漠へと変化する。アフリカやブラジルには、かつての熱帯雨林だった地域が人間に伐り開かれた結果、サバンナになってしまった所もある。

これらの、陸地のたった6%でしかない熱帯雨域には世界ですでに知られているすべての生物種の3分の2が集中している。特に熱帯雨林には500万種が存在する。これは地球上の全生物の40~50%にもなっている。南アメリカだけでも科学的に解明されていない植物が1万5000種もあるといわれる。まさに未知の食物や薬草の宝庫といえる。熱帯雨林は単位面積あたりの樹種が豊富で、面積が広がれば広がるほど樹種も多くなる。これに対し、温帯や冷帯の森林は区域が広がっても一定以上に樹種は増えない。

多くの人々は熱帯雨林を人跡未踏の「緑の魔界」と思っている。倒木や伐採などで日光が当たると、

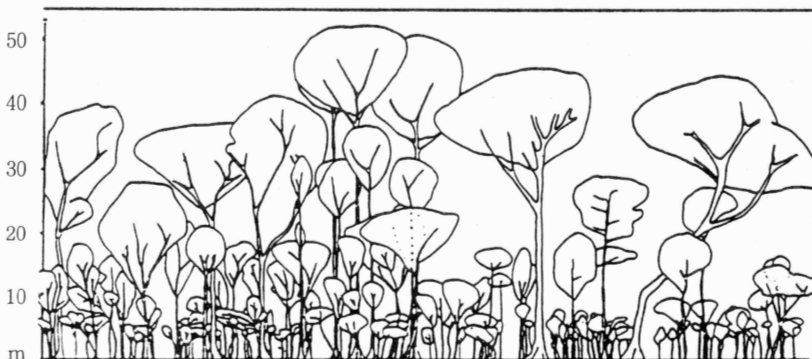


地球上の熱帯雨林の分布

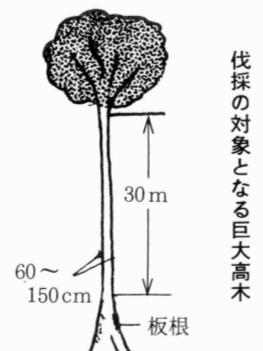
いっせいに植物が伸びようとするので、そのような所は足をふみこめないかもしれない。ところが密生した樹木が屋根を作る森林は、薄暗いが気温は26°Cぐらいに一定していて暑すぎるといったことはない。森には食物をはじめ薪や家を作る材料など、生活に必要なものを何でも手に入れることができる。このような森とかかわりながら何千年も昔どおりの生活を続けている狩猟民もいる。

もう1つ熱帯雨林への誤解は、おい茂る植物から肥沃な土壌を持っているのではないかということである。温帯では土壌に養分が貯えられるが、熱帯雨林では有機物の分解が早いため、樹木や草が養分を吸収してしまう。表土はほんの少ししかない。自然の均衡によってかろうじて森林を維持しているといえる。したがってひとたび森林が破壊されると、熱帯の強烈な日射しと激しい雨で表土は浸食され、固い粘土層が砂地になってしまう。森林が復元するには何百年もかかるといわれる。

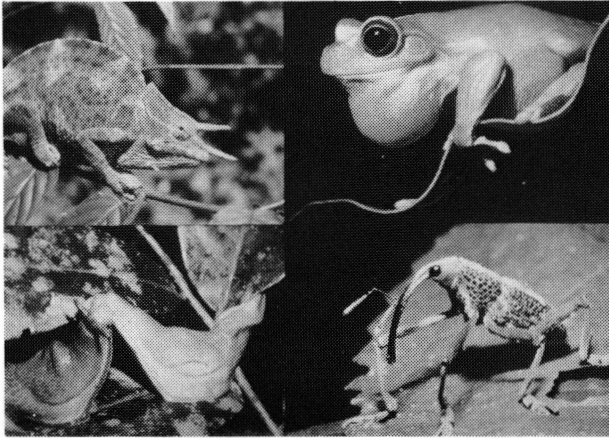
熱帯雨林の断面を見ると、樹種が幾層にもなっていることがわかる。最上層をなす巨大高木は樹高が40~70mにもなり、下枝がなくまっすぐにのびている。これらの木々が商業的伐採の対象になる。



熱帯雨林の断面図
(WWFパンダシリーズ「熱帯雨林」より)



伐採の対象となる巨大高木



(右) 伐採道路を通じて入殖者たちが奥地に入る。
熱帯雨林は遺伝子の宝庫
(左) 写真提供「地球の友」

熱帯雨林の危機

アメリカ政府の調査報告書『西暦2000年の地球』によると、1978年に総面積約11億ヘクタールあった熱帯雨林が、このままのスピードで伐採が続けば西暦2000年には6億600万ヘクタールになってしまうだろうと述べている。データ不足と森林としての定義が不明確なため、森林面積や減少率は各調査によって一定していないが、最も生物の豊かな、低地の熱帯雨林が最も速い速度で破壊されていることはまちがいない。

熱帯林の破壊についてはいくつかの原因があげられる。人口増加などによる焼畑農業の拡大や燃料用木材の伐採、過剰放牧、農地の開墾とプランテーション、商業用伐採、森林火災などである。地球規模からすれば、焼畑や薪炭用に伐採される森林が大半を占める。しかし日本向輸出がその70%を占めるアジア・太平洋地域（島しょ部）では商業的伐採が森林破壊の最も大きな原因だといわれる。⁽¹⁾ 伐採される樹種は限られ、商業的価値のある樹木は1ヘクタールあたり4～5本にしかない。自然倒木のことも考えあわせれば、択伐することで森が再生していくはずであった。それがなぜ破壊の元凶になっているのだろうか。

伐採のしくみ

現地での伐採は伐採権のある伐採業者が行う。現地政府または企業と日本商社との合弁会社が伐採会社を作っている場合もある。またこれらの会社は輸出会社を兼ねることが多い。

伐採に適したラワンの場合、理想的な大きさは直径60～150cm（平均80cm）で、板根⁽²⁾から下枝まで

30mはあるものだという。ラワンは水に浮き合板もしやすいが、重い木は運搬も加工も困難なのでたとえ巨大高木であろうと利用されない。

板根の上からチェーンソーを入れると、ほんの数秒で樹高50メートル以上もある巨木が倒れ、ごう音とともに日光がさし込む。同時にまわりの木々やからみつけた植物もなぎ倒されてしまう。大きく枝を広げていた樹冠部分は切り捨てられ、その場で皮がむかれる。それを玉切りにし、ブルドーザーで川まで引いていくのだ。森に捨てられた木とブルドーザーで押しつぶされた木の総量は伐採された木材の量をはるかに上回る。切り倒された木でも空洞や虫喰い、割れなどがあると森や集材所に捨てられてしまう。伐採された木の64%しか利用されない。

丸太を運ぶために作られた道はほこりっぽく、雨が降れば泥地になる。やがて熱帯の土壌は太陽の直射を受けカチカチに固まり、そうなるともう二度と樹木ははえてこない。川で木材が運べない場合、数千キロにわたるトラック道路がはりめぐらされる。利用される樹種は限られているのでそれらを求めてどんどん奥地に入って行く。雨による泥地を避けるため稜線に道路が作られることもある。このような場合雨が降ると道路脇の斜面が押し流され、地滑りが起こる。毎年9000ヘクタールの原生林が道路のために破壊される。

また木材伐採やプランテーションのため自分たちが住んでいた所を追い出された人々は、これらの道を伝って今まで入ることができなかったような奥地に入殖することができる。伐採のために作られた道路は間接的にも熱帯雨林を破壊しているといえる。この罪は大きい。そして、私たちはこのような道路

(1) ロンドンの国際開発研究所の調査では、東南アジアの熱帯雨林の破壊の75%は直接、間接に木材伐採が原因としている。

(2) 巨大な幹を支えるため根元に張り出した部分。

建設や橋を架けるため、日本のODA（政府開発援助）が使われていることを忘れてはならないだろう。

破壊はすすむ

木材伐採業者のあとにやってきた入殖者によって森林はとどめを刺される。インドネシアやブラジルでは政府が積極的に開墾と移住を勧め、森林を農地に転換させている。世界銀行とアジア開発銀行が“開発援助”を行っているインドネシアの場合、330万人の移民計画（1984～1989）でイリアンジャヤの熱帯林330万ヘクタールが失われるという。また半島マレーシアにおいても1966年から1990年までに466万ヘクタールを伐り開き、142万ヘクタールを農地にする計画だ。

焼畑農法はそれ自体は自然のサイクルを利用したもので、森林が育つための十分な時間と限られた広さなら決して森を破壊することはない。森を焼き、その灰を肥料にして2～3年作物を作ると別の土地に移る。15年から20年もするとその土地には再び木が育ってくる（二次林）。それを燃やした畑にする。何回かそんなことを繰り返すうちに土地がやせてくる。やがてそれらの土地は見捨てられ、農民たちはまったく新しい土地に移動していく。

伐採が小規模に留まっているうちは時間をかければ森は復元することができた。しかし開発の専門家や政府による大規模な入殖の場合、森は壊すにまかされる。入殖者には経済的効率しか念頭になく、一度に広大な森を焼き払ってしまう。復元力を失った森は荒廃し、やがて表土の流出を招く。このような焼畑農法はたしかに森林破壊の最も重大な原因であるといえる。しかしその背景には第三世界の人口増加とそれを入殖によって“解決”せざるを得ない途上国側の事情がある。



シエラクラブ（アメリカの自然保護団体）では世銀の開発による森林破壊を取りあげている。

1982年、アマゾン縦断ハイウェイをアマゾン上流の Rondônia 州にまで延長し、原生林を開拓するというプロジェクトが始められた。これにも世銀が5000億ドルの借款をした。結果は20万人の入殖者の積まれた新聞紙やダンボールをよく見る。このような中でいくつかの団体は自分たちで故紙を回収し、資源として活用している。

プロジェクトによってもたらされたものはブラジルの債務だけであった。途上国側が抱えている問題の解決は急がなければならないが、辛抱強く森との調和を考えながらの開発でなければ結局すべてを失ってしまうということだ。日本政府もこれから援助大国を旨ざそうとしているが、税金が水泡にならないように私たちは監視しなければならない。

入殖者が去った土地にはもう草しかはえなくなる。大企業や大地主がその土地を手に入れ、牛の放牧に使う。1980年のアメリカ議会の報告によれば、中央アメリカの熱帯雨林の4分の1以上が牛の放牧地になり、これらの牛肉はアメリカのハンバーガーや法兰克福ソーセージになっているという。

破壊がもたらすもの

熱帯雨林の破壊の影響は計り知ることができない。まずその森に棲む動植物が絶滅の危険にさらされる。熱帯雨林の生物は種類は豊富でも個体数は少なく、ある特定の地域にしか生棲しないものが多い。それらは相互に依存しあっているため、バランスが崩れると生きてゆけなくなる。

熱帯雨林はまた実に多くの食糧品の原産地でもある。たとえばちょっと考えただけでも、コーヒー、茶、カカオ、バナナ、ココナツ、オレンジ、アボガド、パパイヤ、こしょう、などを挙げることができる。制がん剤や白血病の薬もこれらの熱帯植物から発見されているが、もし熱帯雨林が失われてしまったらまだみつからない食用植物や薬も永遠に私たちの前から消えることになるだろう。

熱帯雨林は私たちのように遠く離れた所に住む者にとっては、動植物の宝庫、あるいは木材の供給地にしか映らないかもしれない。しかし森で生活する人々にとってはそれは生活のすべてだ。森の木で家を作り屋根を葺く。森や川で動物や魚を獲り、小さな開墾地でキャッサバやバナナを作る。森が与えてくれる食糧は、同じ土地で牛を放牧するよりもはるかに豊かだ。ところが森に伐採業者や入殖者がやってくると、森はメチャメチャにされ、やがては追い

出されてしまう。

木材の伐採は直接そこで生活する人ばかりでなく、遠く離れた人々にも影響を与えている。山奥で伐り出された丸太は川に流され、下流に運ばれる。丸太は土手を削り、川底をかき回し、土砂を海にたい積させる。その土砂は河口を塞ぎ、さらに珊瑚礁を窒息させてしまう。珊瑚礁は魚が産卵する所なので、漁業は多大な影響を受ける。

また川の側にある集材所では丸太が虫喰いにあわないように殺虫剤や殺菌剤がまかれる。その化学薬品が川を汚染することにもなる。この薬品で時には魚が死ぬこともあり、流域の人々は魚をとって食べることができなくなる。

熱帯雨林が最も人々に与えている恩恵はその保水効果であろう。降った雨は土壌に吸いこまれ、樹木に蓄えられる。それが植物の蒸散作用により再び水蒸気となって大気に帰される。森林がなくなると雨水は急流となって土砂崩れや洪水を起こす。さらに広範囲に森林が破壊されると、大気に帰る水蒸気が少なくなり雨が降らなくなる。マレーシアのサラワクやネパールでは森林破壊のため洪水と干ばつを繰り返している。JVCが復興プロジェクトを行っているエチオピアでもまず木を植えることが考え

られた。干ばつは木を伐りすぎたせいではないかと思われたからだ。

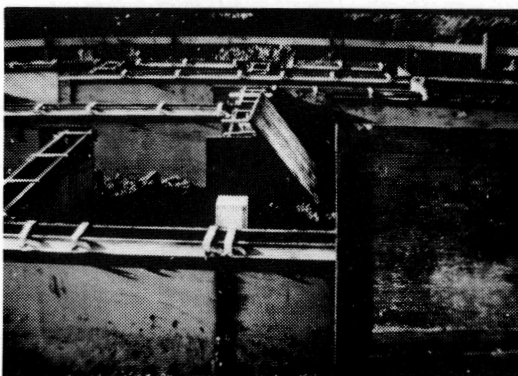
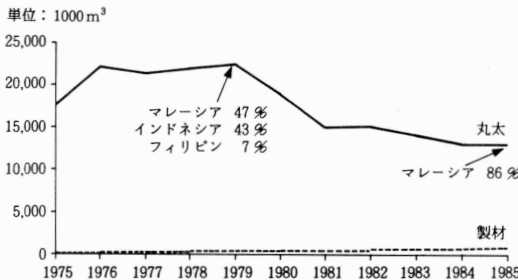
森林の減少はさらに異常気象を招くともいわれている。二酸化炭素が増加すると地上から逃げていく熱を遮断する（温室効果）ので地球の温度が上昇し、南極や北極の水が解けるとい説である。樹木は光合成によって二酸化炭素を吸収し、酸素を排出する。アマゾンの熱帯雨林は地球の30%の酸素を供給しているともいわれている。樹木は燃焼されると自ら二酸化炭素を発生するので、森林の破壊は二酸化炭素の増加を倍加させる。年ごとに二酸化炭素濃度は上昇している。

日本での熱帯材の消費

日本での熱帯材（南洋材）の消費は第2次世界大戦中の国内林業の壊滅と戦後の高度成長建築ブームが引き金になって急激に伸びた。1965年に930万³の丸太輸入高が翌66年には1211万³、1970年には2000万³を超えた。1984年は1294万³で66年以来最も低い数字だったが、世界の総輸入量の40%以上になる。日本は熱帯雨林の破壊に無関係とはいえないのだ。

日本に輸入された丸太は80%が合板にまわされ、

日本の南洋材輸入（1975-1985）



合板の30~40%はコンパネに使われる。
(写真提供「地球の友」)

南洋材産地別輸入比率

単位：数量 1,000m³
比率 %

| 年次 | 南洋材 総輸入量 | 産地別比率 | | | | | 南洋材 総消費量 (A) | 合板用 消費量 (B) | 合板 消費率 (B)/(A) | |
|------|-------------|-----------|-------|----------|-----|------------|--------------------|-------------------|----------------------|------|
| | | フィリ ピン | マレーシア | | | インド ネシア | | | | その他 |
| | | | サバ | サラ ワク | マラヤ | | | | | |
| 1965 | 9,306 | 60.6 | 30.2 | 6.9 | 0.2 | 2.0 | 0.2 | 9,182 | 5,145 | 56.0 |
| 1966 | 12,116 | 55.6 | 29.8 | 10.6 | 0.8 | 2.7 | 0.3 | 11,189 | 6,323 | 56.5 |
| 1967 | 13,344 | 52.4 | 29.1 | 10.7 | 1.8 | 5.1 | 0.5 | 12,878 | 7,514 | 58.3 |
| 1968 | 14,036 | 50.6 | 26.1 | 13.8 | 0.9 | 6.7 | 1.8 | 14,290 | 8,408 | 58.8 |
| 1969 | 17,163 | 46.3 | 23.8 | 11.1 | 1.0 | 15.7 | 2.3 | 16,783 | 10,117 | 60.3 |
| 1970 | 20,237 | 37.7 | 19.5 | 9.3 | 0.9 | 30.1 | 2.9 | 19,760 | 11,788 | 59.7 |
| 1971 | 20,259 | 28.9 | 20.4 | 7.3 | 0.7 | 40.4 | 3.1 | 20,087 | 12,197 | 60.7 |
| 1972 | 21,725 | 23.5 | 24.9 | 6.3 | 0.4 | 41.3 | 3.4 | 20,943 | 12,914 | 61.7 |
| 1973 | 26,789 | 22.9 | 27.3 | 4.7 | 0.3 | 41.9 | 3.8 | 26,048 | 15,424 | 59.2 |
| 1974 | 24,208 | 16.8 | 28.9 | 3.9 | 0.2 | 47.3 | 3.7 | 23,438 | 13,835 | 59.0 |
| 1975 | 17,333 | 16.3 | 34.4 | 4.1 | - | 42.1 | 3.0 | 19,120 | 11,102 | 58.1 |
| 1976 | 22,173 | 7.3 | 38.3 | 7.9 | 0.0 | 43.5 | 2.7 | 21,602 | 12,868 | 59.6 |
| 1977 | 20,947 | 7.7 | 38.8 | 7.1 | 0.0 | 44.3 | 2.6 | 21,156 | 13,122 | 62.0 |
| 1978 | 21,799 | 7.9 | 42.3 | 6.9 | 0.0 | 41.2 | 2.5 | 21,909 | 13,913 | 63.5 |
| 1979 | 22,082 | 5.2 | 37.1 | 10.3 | - | 44.3 | 2.6 | 21,898 | 14,431 | 65.9 |
| 1980 | 18,956 | 5.6 | 33.3 | 11.9 | 0.1 | 45.6 | 3.5 | 19,433 | 12,985 | 66.8 |
| 1981 | 14,728 | 9.8 | 37.2 | 19.8 | - | 28.1 | 5.3 | 16,123 | 11,243 | 69.7 |
| 1982 | 15,121 | 8.1 | 42.6 | 26.8 | - | 16.2 | 5.7 | 14,677 | 10,743 | 73.2 |
| 1983 | 13,879 | 4.9 | 44.9 | 29.4 | - | 15.2 | 5.8 | 14,381 | 10,706 | 74.4 |
| 1984 | 12,943 | 7.3 | 42.3 | 32.9 | - | 10.3 | 7.3 | 13,062 | 10,020 | 76.7 |
| 1985 | 13,001 | 3.1 | 45.3 | 41.5 | - | 1.0 | 8.2 | 12,897 | 9,883 | 76.6 |

出所：日本南洋材協議会



熱帯雨林は
かけがえのない森だ
（写真提供「地球の友」）

残りの20%が製材になる。日本は他の消費国に比べて丸太輸入の割合が高い。しかし輸出国が丸太禁輸措置をとってきたため、漸時丸太が減り合板が増えてきている。日本で消費される合板の30~40%はコンパネといってコンクリートの基礎固めに使われる。現在自然保護団体などでやり玉に上げられているのがこのコンパネだ。以前は松材が使われていたが、木目が出やすいため今はほとんど見かけなくなった。南洋材合板の方が木目もなく安くて耐久性があるというのだが、果たしてそうだろうか。実際に建築現場ではせいぜい多くても5回までしか使えないという。コンクリートからはがしたり、持ち運んでいるうちに傷んでしまうためらしい。それにいろいろな大きさに切るので、一度使ったものは二度と使えない。実は南洋材合板より丈夫な樹脂加工した針葉樹合板（スウェーデン製）もあるが、価格が高いため現在はあまり輸入されていない。

合板のコンパネ以外の用途は内装用床材、タンスの裏側、ひき出しの底板、輸出用大型製品梱包用木箱などである。

パプアニューギニアやマレーシアから輸入されるチップも問題になっているが、これらはダンボールや薬品加工して印刷用の紙になる。よく話題になる割り箸はフィリピンやインドネシアでも作られているが、ほとんどは中国の柳製であった。

これらの熱帯材のほかに、日本では毎年1200万 m^3 の米材が輸入され、国内材は1850万 m^3 （1985年）製産される。日本は地理的、歴史的に東南アジアに関係が深く、熱帯材への依存度が高い。

円高で外材の下がったことや、底をついていた住宅着工数が建て替え需要などで、上向いてきたことから、今後も木材の輸入は増え続けるだろう。ただし熱帯材の丸太は原産国の規制もあって横ばいか減少の傾向にある。熱帯材の枯渇については業界も危機感を持っていて、将来は合板輸入か針葉樹に切り替えざるを得ないと思っている。しかし熱帯材がなくなってから方向転換したのではもう遅い。

森を守るために

今年の3月、横浜で開かれたITTO⁽³⁾（国際熱帯木材機関）の理事会に出席したマレーシアのフリーゼイラー事務局長は「木材輸出をストップするわけにはいかない。雇用の問題もあるし、外貨収入が減っ

てはこまる」自然保護団体に対しても「不可能なことを要求しないでほしい。熱帯雨林の開発は必要だ。それをどこまで環境保護していくかということだ」と言った。これは熱帯雨林問題の複雑さを示している。熱帯雨林は住民の生活の場であるとともに原産国の重要な輸出品目の産地となっているからだ。輸出品として熱帯材は伐り出さなければならない。しかし保護しなくては伐りつくしてしまう。熱帯雨林は伐りつくしたらもうおしまいだ。替わりはない。熱帯材に頼らざるを得ない国のジレンマがある。

果たして自然保護と森林開発が両立するものなのか。熱帯雨林の研究は始まったばかりで、ラワンなど伐採対象の木々の植林には成功していない。たとえ植林できたとしても伐採のスピードは木の生長を待ってこないだろう。タイやフィリピンのようにめばしい森林を伐りつくしてしまった国もある。木を植えることよりも伐らないこと、伐採のスピードを落とすことの方が重要だ。研究の成果を見るまでに森がなくなることありうる。

それにしても今まであまりにも人々は植林を怠ってきた。インドネシアやフィリピンでは伐採のあとに植林を義務づけているし、マレーシアのサバでは植林助成金を輸出業者は支払わなければいけないことになっている。しかし植林が実行されたかどうかはわからない。「植えたことにしてカネを握らせた」こともあったという。

これまで植林されたのは先進国の消費用に作られたプランテーションである。ユーカリやアカシアなどの早生種が植えられたが、これらは紙パルプの原材料にしかならず、住民の生活には役に立たなかった。また早生種は土壌を傷め、単一栽培（モノカルチャー）は干ばつや火災にも弱い。植林は誰のために何を植えるかを考えなければならない。JICAが行っているインドネシアのアグロフォレストリー⁽⁴⁾はよい結果を出しているようだ。しかし東南アジアに熱帯材の80%を依存している日本の林業協力はまだまだ少ない。総額7000万ドルとスウェーデンの9分の1で、伐採に比べて森林保護への関心は低い。

パプアニューギニアの場合、植林を伐採業者に義

(3) 熱帯木材の保護と安定供給のため批准されたITTA（国際熱帯木材協定）の実施機関。本部は横浜。

(4) 住民はチークの植林とひきかえに、苗木の間に2年間だけ作物が作れる。

務づけている。フィリピンやマレーシア、インドネシアの現状を目のあたりにしたこと、熱帯雨林の保護に熱心なオーストラリアの影響によるものだ。日系企業も4社のうち3社が植林を行っている。そのうちSBLC社は日商岩井が75%、パプアニューギニア政府が25%出資している合弁会社である。伐採する一方で植林にも力を入れており、植林面積は今年で3000ヘクタール(500ha/年)になるという。樹種はカメレレ(ユーカリ科)という在来種で20年もすれば樹高60m、直径70cmにもなり製材に利用されるという。今後30年は植林を続けられるようプロジェクトの延長を申請しているが、将来植林木が伐採木に替わることができるかどうかはわからない。この計画に成功すれば、それ以上原生林を伐らなくてもすむのだが。

植林がその成果を見るまでには、どんなに生長の早い早生種でも20年や30年はかかる。私たちが今すぐできることは熱帯林の消費を控える。輸入量を控えることではないだろうか。熱帯林行動ネットワークでは熱帯雨林の伐採に関する倫理規定を作るよう政府に働きかける動きもある。熱帯材は建築用合板やステレオやテレビのキャビネットなどに使われているので、消費者が選択して不買運動をするのは難しい。せめて木や紙の浪費は避け、できるだけ再生して利用するよう心がけたい。「紙は針葉樹でできているんじゃないか」という人もいるだろうが、使い捨ての生活を改めない限り、「熱帯雨林を守る」意味がない。私たちのぜいたくが知らず知らずのうちに熱帯雨林を破壊し、そこで生活する人々の生活を奪ってきたのだから。

熱帯雨林は林業経営で成り立っている木材供給地とは違う。そこに住む動物や人々にとってはかけがえのない森なのだ。マレーシアのサラワクに住む狩猟民、プナン族等の人々は森を自分たちの手に取り戻すため、とうとう実力行使に出た。サラワクはサバ州とともに日本が輸入する熱帯材の60%を担っている。彼らは木材運搬道路を封鎖し、州政府に対し伐採を即時停止するように要求している。プナン族が生活する森はどんどん破壊され、今彼らが住めるのはトゥットー川とリンバン川の間になぜか残されているにすぎない。彼らがほしいのは補償金ではなく、昔どおりの森なのである。彼らの土地をそのままに、伐採を中止することはそんなに難しいことなのだろうか。

この5月になって、日本においても市民団体等が

彼らを支援し、伐採中止を要請するキャンペーンを始めた。戦後日本人は自分の生活に精一杯で、他人のことなどおこまいなしに経済発展させてきた。熱帯材もエビやバナナと同じ意味を持っている。自分たちの使う木材がどこからやってくるのか考えたい。

森に生きる人々にも自分たちの生活を守る権利がある。彼らの声を補償金などで封じようとせず、もっと謙虚に聞くべきではないだろうか。

おわりに

故紙のリサイクルは、輸入材が円高で安くなったことなどから以前ほど回収率は高くない。回収業者がめったに来なくなり、燃えるゴミとしてうず高く積まれた新聞紙やダンボールをよく見る。このような中でいくつかの団体は自分たちで故紙を回収し、資源として活用している。

たとえば生活クラブ生協(03-425-0111)では、組合員が1カ月に1度古新聞(広告とは分類する)を回収し、山梨県のトイレットペーパー屋さんに引きとってもらっている。その分安くトイレットペーパーを購入するそうだ。またJVCのソマリアプロジェクトに古本フェアの売り上げ金を寄付した中部リサイクル運動市民の会では、毎週土、日曜に名古屋周辺のスーパーやデパートの店頭で牛乳パックの回収をしている。牛乳パックはかなり上質のパルプでできており、はがきや名刺にも再生できる。そのほかにパック連(全国牛乳パックの再利用を考える連絡会)など、牛乳パックの回収を専門とする全国的な組織もある。

ゴミも分類すれば資源になるがまとめて捨てればただのゴミだ。地球をきれいに使うのはとても大変だが、町田市のように分別ゴミ収集(可燃ゴミ、不燃ゴミ、ビン、カン、有害ゴミ、資源ゴミ、粗大ゴミ)を5年前から実施しているところもある。このような分類も市民の間にはすっかり定着したという。

先進国は先に得たもの勝ちで地球の資源をどんどん食いつぶしている。パイは限られた分しかない。これではあまりに不公平だ。長い目で見れば、私たちにものはものの浪費を抑え、資源をリサイクルすることしか生きのびる道がないのだと思う。

中部リサイクル運動市民の会

〒461 名古屋市東区東桜2-15-20 光ビル2F
Tel 052(931)4000

パック連

〒401 大月市御太刀2-10 平井方
Tel 0554(22)3611

講演 「アジアの森と人々」

ラジェスワリ・カニアさん



去る3月3日、講演会「アジアの森と人々」が開催された。当初は、サラワクで自然保護運動を続けるハリソン・ガウ氏が来日する予定であったが、現地の情勢が緊迫、急拠、半島マレーシアのラジェスワリ・カニアさんが来日、講演を行った。同氏はマレーシア地球の友、ペナン消費者協会などで活動する一方、サラワク問題で先住民を守るため、弁護士としても活躍している。なお、この報告は、同氏の講演（英語）から直接ではなく、当日会場で通訳されたものをまとめたことを、あらかじめお断わりしておきたい。（編集部）



の舟ももちろん木製です。他には交通手段がないために、舟による運搬は非常に重要です。舟もたくさんあります。しかし、森林破壊が進むと、土壌の侵食が引き起こされ、土や泥が川に流れこみ、川の航行がむずかしくなります。

川底に土砂がたまって浅くなったり、急流が増えたりするわけです。急流の連続で危険な川もあれば、土砂が堆積して通れなくなった川もあります。

また彼らは、生活必需品も森に依存しています。藤でマットやバスケットを作ったりするのです。

このスライドは、サラワクの狩猟民、ペナン族の家族です。ペナン族は狩猟だけで耕作の習慣がありません。魚や猪、鹿などを獲り、野草をつんで生活しています。彼らが、森林伐採によって、一番痛めつけられてると言えます。政府は他の種族のように、1カ所に定住するように強制しているそうですが、彼らにとっては、考えられないことで、定住すれば種族が絶えてしまうかもしれません。

焼畑農業では森林破壊は進まない！

最初に、日本に招いていただいたJVCの方々、また、ここに来ていらっしゃる方々に、感謝の意を表わしたいと思います。でも、日本は寒いですね…。

さて、今日の会は形式ばらず、分かりやすい会にするために、スライドをお見せしながら、いろいろお話することにしましょう。

（編集部注。T/E読者は当然のことながら、スライドを見ることができないので、以下、普通の講演風に、多少、表現を変えてあります）

1985年には、マレーシアから886万tもの木材が輸出されましたが、そのうち534万tが日本向けで、全輸出量の60%になります。

森林破壊は焼畑農業が原因だという、誤まった考えの持ち主が多いのですが、このスライドは焼畑農業がいかに自然と適応し、溶けこんでいるかを示すものです。それ以外でもサラワクの先住民たちは、現在、生活のあらゆる部分を見直し始めています。

その一方、金儲けのため、どんどん樹木が切られ、彼らは以前より狭い土地に住むことを余儀なくされています。その結果、土地の養分は減り、収穫量も落ちていきます。焼畑農業は、広い地域のなかで巡回すれば、一度耕された土地も、ふたたび戻ってくるころには、完全に再生されているのですが……。

サラワクの人々にとって、木は重要な意味を持っています。彼らにとって、森林が破壊されるということは、生活自体が破壊されるということです。

たとえば、彼らは物を運ぶのに川を使います。そ

伐採は川を殺し、生活を破壊する

伐採の最初に、道路をつけるための木が切られます。美しい風景のなか、自然とは無関係に、むきだしの地面が、まっすぐのびていきます。雨が降れば土砂は流れ、川を汚します。その結果、住民にとって最大の蛋白資源である魚は減り、飲み水や体を洗う水さえ不足することさえあるのです。

道路をつけるために入ったブルドーザーやローラーは、両側の木の根を傷つけ枯らしていきます。また道路を作る人たちのキャンプ地のためにも、森林は伐採されます。

次の段階が本格的な伐採です。沼地など機械力が使えないところでは、原住民が伐採、運搬しますが、

人力の現場は危険がいっぱいです。事実、しばしば事故が起こりますが彼らには何の保障もありません。それどころか、医療費さえ出ないのです。

また、未舗装のデコボコだらけの道を、ブルドーザーやローラーが行き交います。運転手の賃金は歩合制ですから、時には時速80キロで飛ばし、またこぼれおちんばかりも材木を積みます。

さらに、トラックに積む前に、樹皮をはぐ作業があるのですが、鋭い刃物で自らを切ったり、丸太から落ちたりする事故が絶えません。

伐採時の直接的被害だけではありません。ランをとっていた地域で、ランを保護していた木を切ったため、ランがとれなくなるという被害もありました。伐採用の機械の運搬のため、耕地が踏み荒された村もありました。

また伐採された木も搬出されるのは、輸出向きのものだけで、細い木、枝、皮などは、そのまま川に捨てられ、川を汚し、川岸の侵食の原因になります。

このような乱暴な生活破壊はなぜ起こるのでしょうか。その原因のひとつは、州政府が無責任に許可を出していることです。政府独自ではなんの事前調査もしていません。一応、住民の同意書が必要になってはいますが、甘い話を持ちかけたり、ウソをいったりして、サインをもらっています。そして一度、同意書を集めて許可を得ると伐採地区の住民に対してなんの保障もないなど、伐採業者に有利な条件で、強引に作業がすすめられます。

陸の孤島で苦闘する現地の状況は

スライドはこれで終わりです。これからは、サラワクでの環境保護運動の問題点を話しますが、最大のもは地域から地域への移動がとても困難なことです。交通は川を利用しますが、川筋が違えば移動に時間がかかりますし、森のなかに行くのはさらに大変です。

私は今日、ここにくる予定だったハリソンさんという現地の活動家と、1月の中旬、ある村に行きました。その時の話をしましょう。

まず、空港からマルディというところまで行くのに、急行ボートで2時間半かかりました。マルディからロング・ラマというところに行ったのですが、商業用急行ボートでさらに2時間半、そこから、木材伐採用の道路をジープにのって5時間、遊園地のジェットコースターのような坂道を、ほこりまみれになりながら時速80キロで飛ばすドライブです。遅くなっ

て宿泊地ペナンに到着、翌朝、10時30分に目的地、ロング・サリダンに向かって舟に乗りましたが、着いたのはなんと夜7時半。その間、ずーっと舟に乗って32もの急流を越していきました。

ロング・サリダンには、4～5軒のロングハウスがあり、200～300人が住んでいます。それぞれのロングハウスには、1人ずつチーフがいるのですが、集まったのは彼らです。彼らの話では3つのことが話題になりました。

まず、同意書へのサインですが、ほとんど強制的だったそうです。それにそのとき知らされたことと現実とは、全然違っていました。

もし彼らが伐採を実力で阻止しようとする、会社は警察に知らせます。警察は会社の味方ですから、彼らを半日あまり拘留してしまいます。すぐに釈放するのですが「邪魔するな」というばかりです。

さらに、政府に自分たちが依存する森林を保護区にするよう申請したそうです。しかし、政府からはなんの反応もないようです。マレーシア地球の友では、彼らに裁判を起すようにすすめました。

私たちは政府に対しても、伐採によって森林が減少している現在、森林保護区を設定するように求め、申請を理由なく無視したことに抗議しています。

翌日、私たちは第5地区のフロム・アピールというところに行きましたが、そこへは川が通じていませんでした。そこで、私たちは伐採のために作られた道を進んだのですが、ちょうど雨がふって、道路がどのような影響をおよぼしているか、実施調査のようなかたちになりました。

いったん雨がふると、道はドロドロになり、それまではいていた、つかかけでは歩けません。私たちは杖をついてはだしで、2時間半も歩いて最初のキャンプにたどりつきました。

そのキャンプからはジープにのり、5時間もかかって、ドンデンパ・ビレッジに行きました。そこでも話し合いをもったのですが、その内容は前日でしたこととほとんど同じでした。

このあと質疑があり、サラワクに行ってきたばかりというイギリス人の出席があり、彼と講演者によって、現状が補足された。それによると、現在、伐採業者と住民による対立が頻発しているが、政府はその原因を外国人のおおりとみなしている。サラワク州政府は、観光客をふくめたすべての外国人のしめだしをはかっているということである。

新木場を訪ねて

戦後復興と南洋材

近ごろ森林についての記事や論議などをよく耳にする。日本国内では知床国有林の伐採、海外ではマレーシアのサラワク州、サバ州における乱開発などがそうだ。そこで世界的に問題となっている南洋材についての基礎知識を学ぶため、江東区新木場にある東和木材(株)社長井上さんにお話をうかがった。

東和木材では、取扱いの3分の2が南洋材で3分の1が米材だ。また南洋材のうちその半部分が製材品として輸入されたもので、残りは丸太である。それらを加工して販売したり、小売り店や建具メーカー、問屋さんに売っている。東和木材のように南洋材を主体として扱っている会社は、東京で45社、日本全体で182社ほどあり、他に小さいところもたくさんある。

南洋材とは、フィリピン、インドネシア、マレーシア、PNG(パプアニューギニア)、シンガポール、ソロモン諸島、ブルネイの7カ国(地域)で産出する木材のことを指す。まずはその用途や歴史について伺った。

南洋材の用途は、建物の中の内装や窓枠、家具で、なかには柱などにも使われる。日本の場合南洋材が入るまで、建築材は主に杉が使われていた。南洋材が現在のように使われるようになったのは第二次大戦後らしい(一部は戦前にも使われた)。南洋材が日本で使われるようになったとっかかりは、製材ではなく合板であった。戦後の経済復興のため、輸出産業として合板工場が政府の輸出奨励策に伴って急激に伸びた。そのときの原料として南洋材が適していたのだ。

このように初めは輸出合板用に大量に使われ、やがて徐々に内需の面にも向けられるようになる。「実際使ってみると、非常に使いやすく、節目もないし、きれいだ」ということと、コスト的にも杉などの国内の針葉樹よりも安かった。また原産地においても港を作る必要がなく、山から木を切ってちょっとした入江に出してきて船に積むというように、南洋材は非常に伐採しやすい条件にあった。

半導体のかたきは木材で

去年(1986年)の木材需要量の65%は輸入材、残りが国内のものだと言われている。林野庁では、この割合を逆転させたいようだが、「半々ぐらいになればいいほう」と井上さんは言う。行政側としては、これまでなるべく国内材を使わずに、外国から丸太を持ってきて、日本の荒廃した山林を回復させるといふ方針をとってきた。それが、今日、米がたくさんとれるのと同様に、国内の木を切れるようになり、国産材を使ってくださいというときには、国産材ばなれになっていたのだ。

工場で製材するためには、生産性の良い太さの木というものがある。そうなるとどうしても米材とか北洋材(ソ連材)になってしまう。その上コスト面でも国内材はかなわない。例えば、北海道から東京へフェリーを使って運んでくるものと、カナダから日本に運んでくるものとはあまり差がないようだ。井上さんは「今、最もポピュラーな米ツガの値段は、国から助成金をもらって切っている日本の間伐材と比べてどっこいどっこいだ」という。

一方アジアから運ばれてくる木材(製材)の価格はほとんどが税金だ。輸出価格の30%が輸出税、また日本でのCIF(運賃・保険料込みの価格)の10%が税金だという。

丸太の場合、立木の価格のほかにコンセッション・フィーという権利金を相手国政府に納めなくては行けない。コンセッション・フィーとは、機材を導入して、道路を作り、輸送機材の償却までを含む値のことをいう。だから南洋材丸太の場合、コンセッション・フィー、労務コスト、船コストそして日本に来てからの荷役コストなどがかかり、その上に税金がかかる。

最近の1ドル140円を割るという円高ドル安は、どのくらい木材の値段に影響を与えているかを聞いてみた。

「円高で潤うのはだいたい産地側と日本の建設業者などで、仲介業者はその恩恵にあやかれない。その理由は、円高で木材の単価が安くなった分輸入量が増加する。その上産地側から輸出圧力がかかってさらに入荷量がふえる。輸入業者は薄利多売に走るの



新木場に積み上げられた東南アジアからの製材

で価格はいっそう安くなる。従って出荷の増えた産地側と価格が安くなった建設業者などが得をする」という図式になるようだ。

去年（1986年）、日本が向こうで買いつける木材の現地価格は、史上最高価格を出している。木材を売る側は輸出欲が旺盛で「もっと買え、もっと買え」とせまってくる。それを扱う日本の材木屋は、たくさん押しつけられて「半導体のかたきを材木で取られている」と井上さんは言う。

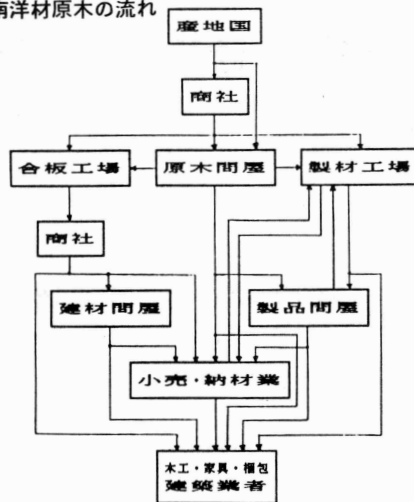
南洋材のゆくえ

日本国内における南洋材の需要は建築用としては減少している。近ごろは構造材自体の需要が減り、市場自体が小さくなっているのに安い米材、北洋材がはいつてくる。そうすると、その市場が国産材の方に影響を与え、南洋材にも影響を与える。国産材ほどではないが南洋材も値を下げている。

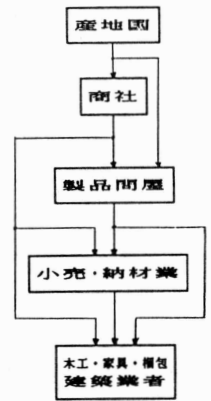
南洋材の使われ方も変化しつつある。例えば集成材*だ。日本人の感覚では集成材というのは高級品だというイメージがない。逆に無垢のものの方が代用品としての考え方が強い。また集成材は手間はかかるが、コスト面ではそれほど高くない。昔、テーブルに使われた板はラワン1枚でとれたが、コストがかかる。それに比べ、集成材で作ったものの方が、デザイン的にもおもしろいし、人気が出てきているみたいだ。

井上さんはこの傾向について「木材というものは高度に加工したものがいいかというところではない。むしろ木材としての商品価値は落ちていくんじゃないか」と言う。確かになるべく自然の状態に近いほうがいいだろう。しかしそのようなものは高くて一

南洋材原木の流れ



南洋材製材品の流れ



（東和木材 提供）

般の人には買えないものになり、それでしかたなく集成材で作ったものを買うようになったのだと思う。

井上さんはフィリピン、マレーシア、インドネシアなど、年平均3回ぐらい現地に足を運ぶ。そこで現地の状況について聞くと、「フィリピンのダバオは日本人の入植者が町を発展させた。日本がどんどん木材を買ったときには現地の人も潤って、ある程度豊かな生活をしていた。しかし今は、丸太輸出を禁止したり、また資源の枯渇などによって治安が悪くなっている」と答える。木を切るから治安が悪化したのか、それとも日本が買わなくなったからなのか、悪化の原因を決めつけることはできない。

取材が終わり、井上さんに駅まで送ってもらった。その車の中で、NHKのテレビでも放送された『炎熱商人』の話をした。なんと井上さんは小説のヒントになった昭和46年秋にマニラで起った事件の関係者を知っていた。小説の中にでてくる誠意と情熱にあふれた小寺のような商社員が実際にいたのだ。しかし最近は何もみない人物は「少なくなっている」と井上さんは残念がる。

事件のあった昭和46年ごろは、まだフィリピンから来る南洋材は全輸入量の3割を占めていた。わずか数年でフィリピンのめぼしいラワンは伐りつくされ、今舞台はマレーシアのサバ、サラワクに移っている。小寺の理想とはうらはらに、根こそぎ収奪がいっそう激しくなっている。（正木幹生）

* ひき板や小角材などを繊維方向を平行にして、長さ、幅、および厚さの方向に集成、接着した材料のこと。

熱帯林行動ネットワーク

(Japan Tropical Forest Action Network/JATAN)

〒150 東京都渋谷区桜丘 9-17
親和ビル 501
Tel 03 (770) 6308

今年の3月22日、23日に横浜でITTO(国際熱帯木材機関)の理事会が開かれ、各国の自然保護団体が最大の熱帯材消費国の日本に集まった。「熱帯林行動ネットワーク」は、この機会に熱帯林の現状を大ぜいの人に知ってもらい、熱帯林保護のために行動しようと、自然保護団体、消費者団体、海外協力団体などで作ったグループである。JVCもエチオピア事業担当の加納妙が参加した。

これまで日本でもいくつかのNGOが熱帯林に関心を持ち、地道に活動していたが、世論を盛り上げるまでには至っていなかった。まず2月から3月にかけて連続講座「ジャパン・コネクション/アジアの熱帯林と日本人」や「国際熱帯林シンポジウム」を開き、熱帯林問題をアピールした。これらの催しはかなりの反響を呼び、どの会場もほぼ満員の盛況だった。

現在活動は第2ラウンドに入っている。組織を再編成し、会員制もとり入れた。広報用キッドの作成をしたり、熱帯材貿易を調査して出版するなどプログラムのアイデアはいくつかあるが、悩みは何といっても資金不足だ。欧米の何万人もの会員を擁する自然保護団体とは比べようもないが、少しずつ会員を増やし、安定した活動ができるようにしたいという。しかし、熱帯林問題は単なる自然保護運動ではなく南北問題もからんでいるので、企業に訴えかけ

るのはなかなか難しい。また日本人の森林に対する関心も国内に片寄りがちだ。

事務局長の黒田さんは「今まで日本の保護団体は国内の問題に手いっぱい、海外にはあまり目が行かなかった。また日本の影響の大きさにも気づいていなかったが、もはやそれだけではすまされなくなっている。日本のODAや日系企業が現地社会に大きなインパクトを与えていることに気がつかなければならぬし、関心を持つことは義務だと思っている。これからは国内の自然保護団体にも呼びかけて運動を広げていきたい」といっている。

昨年9月、マレーシアのペナンで「第三世界森林資源危機会議」が開かれ、非難は日本に集中した。日本のNGOについても、どうしてだまって見ているのか、いったい何をしているのかといわれた。熱帯林行動ネットワークはそれらの批判に応えたもので、内向きだった日本の市民運動を外に向けた数少ないNGOの1つである。

現在専従スタッフは事務局長の黒田洋一さんだけで、あとは結成時に集まった各NGOの有志とボランティアが働いている。5月末からサラワク先住民支援のための署名運動を行っているので、猫の手も借りたい忙しさだ。もし手伝って下さる方がいたら大歓迎とのことである。

JATANからのお知らせ

●署名運動に協力して下さい

JATANではサラワクの先住民支援のための署名運動を行っています。彼らが彼らの森で今までどおりの生活を営むことができるように、サラワク州政府当局にこれ以上の森林伐採を停止するよう請願しています。どうか皆さんもこの署名運動に協力して下さい。またこの署名運動および彼らの抗議行動を支えるためのカンパも募っています。

郵便振替口座 東京 3-153891

加入者名 熱帯林行動ネットワーク

●会員になるには

会員(ニュースレターや資料をお送りします)

個人 4,000円 市民団体 1万円

高校生以下 2,000円 企業、官庁 5万円

賛助会員

個人 5万円 団体 10万円

以上の年会費を納めて下さい。

●出版物と販売資料

・熱帯林問題資料集 600円 ㊦200円

・森林保全と世界の木材貿易 500円 ㊦200円

・NATIVES OF SARAWAK - Survival in Borneo's Vanishing Forest (英文)

Evelyn Hong 著 2,000円 ㊦300円

郵送料を添えてお申し込み下さい。

JVCと熱帯林問題——利己主義な下水設計

JVCと熱帯林…妙な取り合わせと思うだろうか？しかし、これをこじつけるには、さして努力を要しない。

例えばソマリアの難民キャンプ。先日ここを訪れた私は、一見して愕然となった。首都から車で半日、それまで半砂漠とはいえ、一応ブッシュに覆われていた大地が、ここではむき出しだった。薪を求めて人々が周囲から木々を剥ぎ取っていったためだ。移住後のキャンプ跡地には、瓦礫と呼べるほどのものすら残されていない。「文明の跡に砂漠あり」、こんな墓標でも立てたいような光景だ。

こうした、押し出された集団の仮り寝の地、難民キャンプと砂漠製造業の問題は、ソマリアに限ったことではない。パキスタン、スーダン等の例をご存知の方も多いただろう。

人間の“天つば”行為は、例えばJVCが緊急医療救援から復興援助へと駒を進めるに至ったエチオピアにおいても、その結果を端的に示している。エチオピアの干ばつで被害を受けた人々のことを、生態学的難民と呼ぶ人も多い。森林など、生態系の破壊が干ばつ・飢餓を招いた、そんな意味が込められているらしい。森林破壊→干ばつ、という単純図式は好きではない。が、これがエチオピアの悲劇の一つの促進剤になっていることは否めない。私たちもエチオピアの緑をむしり取られた大地を目前にして、そう思わざるをえなかった。そのことが、「総合的復興援助」という枠組の中で、“木を植える”という行為につながって来たのだ。(ただしエチオピア・マージャ村付近は熱帯林ではないが)

こう言うと、それは彼らが自分で切って自分で困っているのだから、自業自得、と思われるかも知れない。しかし、熱帯林のその大半は開発途上国に存在している、という事実を考えていただきたい。先進国と途上国は、下水路の上流と下流のようなものだ。同じ下水をその足元に流している。ただ違いは、蓋を持つか否かだ。先進国では、汚ないものに蓋をする。覆って決して目に触れないようにしてしまう。そして素知らぬ顔で、人の所へ流してしまう。これが蓋を持たぬ途上国側で流れを集め、一挙に露呈するのだ。代理戦争も、難民も、森林破壊も、飢

餓も、同様にその一端であふれ出た汚水だ。もちろん、その責任総てが私たちにある、とは言えないだろう。しかし、私たちの流した汚水がその状況をより複雑にしていることも、また、否定しようがないだろう。

マレーシアの森を見れば、その関係が具体的に見えてくるかも知れない。自分のしっぽを食う蜥蜴のように、消費のために消費し、自己矛盾を支え切れず国内林業を見捨て、日本は木材をアジアの森で食い荒らしている。マレーシアのサバ、サラワクの木材輸出の6割は日本へ来ている。私たちは、これをコンクリートパネルに使い捨て、無くても困らない家具にする。そしてその森にもともと住んでいた人々は住み家を、土地を、生活の糧を奪われ、今(87年5月現在)、自らの最後の聖地を守るため、伐採道封鎖という抵抗をしているのだ。

こういう事実の前で、私たちは、「森林破壊は焼き畑のせいだ」とか「彼らが売りがあって切ってる」とかで、言いのがれることができるだろうか。私には、それは、窓から川にゴミを投げ捨て、素知らぬ顔をしているマンション人種の行為と同じに見えるのだ。

しかしなお、JVCはマレーシアと関係ないではないか、「難民問題にからんでというならわかるが、なぜ熱帯林なのだ」と疑問を持つ方がおられるだろうか。…これ以上は蛇足になりそうだが、難民も、森林破壊も、同様に我々の流した汚物が途上国側で露呈したものに他ならない。JVCは、難民・飢餓といった断面から、この下水道にかかわり出したのだが、この汚水と対決するには、こんなインチキでご都合主義の配管設計を、少しでも修正していく必要が出てくる。そして熱帯林問題も、こうした配管改修工事を要する同じ下水道の断面なのだ。

こんな所が、何故私たちが、微力ながら熱帯林問題に顔を出し、お手伝いをさせてもらったか、についての私の理解。皆さんもぜひ、自分なりの結びつきについて考えていただきたい。案外JVCの活動をとらえなおす、もう1つの視点が広がるかも知れないから…。

(加納 妙)

深夜の山谷を歩く

—— 山谷見学会 ——

大満 邦彦



山谷ドヤ街を知ってますか

皆さんは、山谷ドヤ街と呼ばれる地域が東京都内にあるのを御存知でしょうか。上野から地下鉄で3つ目、南千住駅を降りて浅草方面に5分ほど歩くと泪橋交差点に出ます。この交差点を中心に半径1キロメートルの地域が、山谷ドヤ街と呼ばれているのです。

ここには、約7000人の日雇い労働者が住みついています。ドヤとは安宿・簡易宿泊所のことです。たった500平方メートルの土地に200～300軒のドヤが密集しています。労働者市場としての山谷は男の街であり、また社会からの落伍者の隠れ場でもあります。そのために、荒れた街、アルコールの街、果ては無法地帯とまでいわれて社会から蔑視され、隔絶されて、スラム化してきました。この状況に対し、行政は山谷を正常な街に返す努力を試みましたが、それは経済の好成長期の間だけでした。現在は「何もしないことが最善の山谷対策」と傍観することにとどまっています。

以上、山谷についての概要でしたが、山谷の名前は知っていても、たいていの方は足を踏み入れたこともないし、場所も御存知ないのではないのでしょうか。今年1月に、JVCの有志が初めて試みた山谷見学会は、まさにこのような日本の中の忘れられた地域の実態を把握し、各自が社会問題を考える機会にしたいという趣旨で始めたものです。1度限りの予定だったのですが、参加希望者の続出により、その後も月1回のペースで、4月まで4回にわたって開いてきました。

この見学会で私たちが毎回お世話になった方が、得野光志さんです。得野さんは、JYVA（日本青年奉仕協会）から、山谷で活動しているボランティア団体である山友会に派遣された方です。労働者のカウンセラーを、この4月までされていました。得野さんには、見学会の企画にアドバイスを頂いたり、当日のガイド役をお願いしたり、宿泊とミーティングの場所として、山友会岩下センターを使用させて

頂いたり、至れり尽くせりでした。得野さんの御協力があってこそ、意義のある見学会として、ここまで続けられたと思います。

山谷見学 — 午後6時半から午前8時まで

山谷見学会の大きな柱は、山谷ドヤ街を少人数のグループで歩いてみて、感じたことを語り合ったり、質疑応答したりすることです。回を重ねるに連れて参加者も増え、第1回目の6人から、先日の第4回目では、15人に増えました。もっとも、宿泊できる人数の関係で、1度に20人ぐらゐまでが限度ですが。

さて、それでは、先日4月17日夜から翌朝にかけての、第4回目山谷見学会の内容について報告しましょう。参加者は得野さんを入れて15人。夜6時半に集合しました。参加メンバーは学生と社会人が半々でした。私たちが宿泊、ミーティングに利用させて頂く山友会岩下センターは、昼間、山谷に住む高齢の労働者のための保養施設に利用されている所です。

夜7時頃から山谷ドヤ街をざっと歩いて来ました。山谷の夜は暮れるのが早く、夜の8時か9時迄には、大部分の立ち飲みの居酒屋は閉店します。何しろ毎日の仕事探しが朝の非常に早い時間ですから、夜ふかしもできないわけです。

今回の山谷見学会は、私たちにとって大きな意味を持つものでした。というのは、第1回目からずっとお世話になってきた得野さんが、山友会のボランティアの任期が切れてここを出られるということで、得野さんにこのような形でお世話になる最後の見学会だったからです。そこで、今回は今までの総決算として、得野さんに頼らず、私たちJVCの有志が各グループのリーダーになって、自分たちなりに何を見学し、どう考えていくか、各自企画することにしました。

夜9時を過ぎると、路上で野宿をしている人たちの姿が多く目に止まりました。昨今の山谷は、全般的な不況と企業のオートメーション化の影響を受け

で労働力の需要がへり、1人が就業できるのは1カ月の内たった3日間ぐらいです。1晩700円の素泊り料金も支払えずに路上や公園に寝る人は全体の3分の1にもなります。冬になると寒い戸外、凍りつく地面の上に寝て凍死するものが相つぐということです。誰にも看とられずにいつの間にかひっそりとドヤの片隅みで死んでいく人と合わせると、その数は年間90人にもなるそうです。車座になって路上で酒盛りをしているおじさんたちの仲間に入れてもらい、よもやま話を聞いたりもしました。とても人のいいおじさんたちで、山谷に入って20年余、かつて新宿副都心の高層ビルの建設に携わったという自慢話等、長々と聞かせてもらいました。

その後、深夜から早朝にかけて、各自の感想を語り合ったり、討論したりしました。朝、日が昇る前から、山谷ドヤ街は人でいっぱい、ものすごい活気になります。おそらく、この時間が山谷の街の一番生き生きとした時間でしょう。まず、玉姫公園での朝市を見学。泥棒街と呼ばれるぐらい、どこから集めて来たのかわからない雑多な商品が並んでいます。ミュージック・テープの海賊版、紺のジャンパー等が多いようです。

職業安定所は、6時半になると戸が開いて、わーっと労働者の一群があふれ込み、間もなく、また元の平静が戻ってきます。ショッキングなことが1つありました。玉姫公園の球技場で小学生が少年野球の練習をしていましたが、高い金網で四方を囲まれ、鍵がかけられた中でやっているのです。中で野宿できないようにという意味あいもあるのですが、山谷に住む住民と労働者の関係を、この高い金網が象徴しているような気がします。

朝、8時頃には解散し、朝食後時間のある人は、山友会の山友クリニック、岩下センターに分かれてお手伝いをさせて頂きました。山友クリニックではボランティアのお医者さんが、アルコール中毒の患者さんの診療に当たっています。その建物の1階で得野さんがカウンセラーの仕事をしています。私たちは、労働者の方のための、衣類、下着、ビスケット等の仕分け、配給の手伝いをしました。

見棄てられた街

以上が、第4回山谷見学会の主な内容です。ところで、そもそも山谷という地域は、どのようにして成り立ってきたのでしょうか。昭和21年、東京都は焼野原と化した山谷にテントを張り、上野地下道

に住みついた浮浪者を収容しました。これが山谷ドヤ街の始まりで、その後、経済の高度成長にともない建設労働者が盛んに求められ、山谷は一大日雇い労働者供給市場となり繁栄しました。それと共に単身者がどんどん流れ込んできて、スラム化したわけです。

今回、ミーティングで論議したことですが、山谷は、大阪の釜ヶ崎や横浜の寿町等の他のスラム、ひいては海外のバンコク、カルカッタのような所のスラムと比べても、実に特異な存在なのではないかという話が出ました。何故なら、他のスラムと呼ばれている地域には、貧しいながらも貧乏長屋での家族ぐるみの生活があります。しかし、山谷の労働者は皆、単身で暮らし、お互いを兄弟のようにつきあって、孤独をまぎらしています。人間の最も基本的な生活単位としての家族というものさえあれば、自分の死んだ後も、子供という分身に遺志を託すこともできます。このような、家族を持たないスラムとは、まさに核家族化の進む現代日本の象徴のように思われて、心寒くなる思いがします。

山谷の労働者の生活について考える時、私は、以前に読んだ『あゝ野麦峠』や『サンダカン八番娼館』を思い出します。前者は、明治・大正期の近代日本繁栄の影での女工哀史、後者は、南洋の異国で春をひさぎ続けたからゆきさんについての作品ですが、国の繁栄の中で、名も無き多くの人々が見棄てられていったという点で、現在の山谷と何かつながっているように思われてなりません。

もともと1、2回だけで終る予定だった山谷見学会も、一度参加したいという希望者の要望に応じて、また、得野さんの厚意に甘え、もう4回を迎えました。得野さんが山谷を出られるので、今後は後任の渡辺一彦さんのお世話になります。未定の部分も多いですが、とりあえず新規参加の希望者がいる間は、また再び開きたいと思います。

なお、現在私たちJVCの有志で、読み書きのできない山谷の労働者の人たちのための識字教室“山谷学級”の運営に協力しています。隔週金曜日の夜7:00~8:00に山谷兄弟伝道所でやっています。ボランティア教師になっていただける人を探していますので、関心のある方は是非御連絡下さい。

連絡先 大満 ☎03(910)0187
また山友会についての問い合わせは、☎03(874)1269 山友クリニックです。

※参考資料—山友会パンフレット、山谷—忘れられた日本

援助の裏側で ——— タイ・カンブチア国境より

元ノンチャン補助給食プロジェクト 会計担当 蓮尾慶治

“女になりたい” 難民たち

タイ・カンブチア国境の難民キャンプにおける出生率は世界一と言われている。それだけに、やたらに子供が目につく。キャンプで生まれ育ち、まだ外界を知らない子供も多い。

キャンプの子供も日本と同じように恋もする。初恋はキャンプの中ということもある。その中には次のような話もある。

12歳になる男の子が近所に住む1歳下の子を好きになった。その子はとてもきれいで、活発な子だった。ある日みんなで貯水池に水遊びに行った時、この男の子はあの子のを見てしまった。そしたらあるはずがないものがあつたのである。彼女？は男の子だったのである。

キャンプには男か女かわからないような子がたくさん目につく。髪が長く、女の子の服装をしている男の子が多い。これは食糧配給のやり方に原因がある。男子は戦闘員になり得るので、軍事援助は行わないという国連の方針で、女子のみにしか配給されないのである。(もちろん3歳以下の幼児や栄養失調児に関しては別だ) 男の多い家族は十分な食料を受け取れない。そのために男の子でも女の子として育てられるということがよくある。

食糧配給をめぐる、援助する側とされる側の攻防戦が繰り広げられる。される側は少しでも多く取ろうとし、する側は必要なだけ援助しようとする。その間で犠牲になるのが子供たちである。

国連の食糧配給を受けられるのは、身長110cm以上の女子に限られている。食糧カードの配布は、対象となり得る人々を柵の中に集め、一人ずつチェックして行われる。大人たちはカードを手に入れるため、子供にだましとることを教え込む。男の子には女装させる。背の足らない子には、底上げのサンダルとそれを隠すためのサロンをはかせる。頭には大きな帽子を被せる。背を測るときには、背伸びをするように教え込む。チェックする側としては、背の方は調べやすい。しかし性別はそうはいかない。本人に確認すると女と言いつ張っているが、どう見ても男に見える時がある。このような場合、最終的に下腹部をチェックすることが少なくない。もし男だったら、

この子は周囲の人々の嘲笑を浴びて逃げていく。カードを手に入れられなかったと知った親は、この子に折檻を加える。もし女の子だったら……。なかには中学生ぐらいの子もいる。男と間違えられたうえに、外国人に下腹部をチェックされる。この時に受ける心の傷の大きさは計り知れない。

キャンプは閉鎖されており、人々は生産手段を持たない。生きていくためには、外部からの援助に依存せざるを得ない。そのために援助する側とされる側の上下関係が、はっきりできあがってしまっている。される側もする側にへりくだる。する側の中にも、自分たちが彼らの上にあることがさも当然であるかのように振舞っている者が少なくない。このような中で、彼らが人間としての尊厳を保つことは困難である。

治安上の問題も多い。タイ兵、クメール兵、山賊による強盗、レイプ事件も少なくない。しばしば夫や親の目の前でレイプされるが、相手が武器を所持しているために防げない。キャンプ内外でのクメール兵、タイ兵、ベトナム軍による内輪もめや戦闘のため、キャンプ内に弾が飛んでくることもある。キャンプの中で安心して暮らしていくことはできないのである。

若者にとって問題なのは、徴兵と教育・仕事の機会が少ないことである。成人のうち半分以上は職を持たない。職場は非常に限られており、カンブチア人の Administration (行政担当)、援助団体及び不法行為である商売ぐらいである。勉強したくとも、一般の人々に認められているのは初等教育だけである。学校がないばかりか、本も手に入れることができず、独学もままならない。また成人男子の半分近くが兵役についている。戦闘や地雷のために足を失ったり、体が不自由になっている者が目につく。

同年代のカンブチア人と接し、いかに日本が恵まれているかを再認識した。と同時に、いかに多くの日本人がその機会を自ら放棄しているかを。

彼らが人間らしい生活をできるようになるのは、いつのことであろうか。彼らの目には、明るい未来も希望もまだ見えない。

カオイダン・キャンプ

(タイ政府が認めた)
難 民

- KD (KAO-I-DANG CARD 保持者)
83年2月以前にキャンプに到着した。
第三国定住の申請ができる。
- FC (FAMILY CARD 保持者)
83年2月～84年8月にキャンプに到着。
第三国定住の申請ができる。
- RC (RATION CARD 保持者)
84年8月以降にキャンプに到着。85年9月に登録。
食糧の配給は受けられるが、第三国に行く可能性はない。

国境の難民村

不法入国者

民主カンブチア連合政府の管理下にあり、現在はタイ領域内に逃げこんでいる。

身長110cm以上の女子にのみ食糧配給がある。

※ KD, FC で第三国定住を認められなかった者と RC はカオイダン・キャンプ閉鎖に伴い国境に帰される。

難民がカンブチア国内に帰れない理由

国境のカンブチア難民は、正式には難民ではない。単なる不法入国者、避難民にすぎない。あるいは3派連合政府下のカンブチア国民ともいえる。3派連合は国連において正式にカンブチアを代表する政府として承認されている。しかし、国内にはその拠点を持たない。国内で実権を持っているのは、ヘン・サムリン政権である。84年末のベトナム＝ヘン・サムリン軍による乾季攻勢によって、3派の拠点はすべてつぶされてタイ領内に移動した。

3派連合はシアヌーク、ソン・サン、ポル・ポト(クメール・ルージュ)の3派から成る。国境のキャンプはそれぞれ3派に属し、主なキャンプは、ソン・サン派のサイト2(約14万人)、シアヌーク派のサイトB(約4万人)、クメール・ルージュのサイト8(約3万人)である。全人口は約25万人である。3派連合政府下の人々としてはたいした数ではないが、難民としてはかなりの人数である。

この3派連合を支持しているのは、欧米、ASEAN諸国、中国、日本等である。財政的にはアメリカ、日本、軍事的には中国の果たす役割が大きい。簡単にいえば、アメリカとASEANは、反共、反越で、中国は反ソ、反越で、日本はアメリカやASEANとの関係で3派を支持しているといえる。

国境のカンブチア人たちの願いは、平和な祖国に戻ることである。平和なカンブチアは、ベトナム軍が撤退し、ポル・ポトが復帰せず、ポル・ポトによって破壊された国内が再建され安定した時に初めて実現する。

しかし、現状はそれには程遠い。ベトナム軍は今だに国内に駐留を続けている。国際的に認められている3派連合にはポル・ポトが含まれている。国内の再建も3派のゲリラとの戦闘のために、なかなか力を入れることができない。そのうえに援助も東側諸国の一部によるものだけで、西側諸国のは入っておらず、国連によるものも十分ではない。

国境の人々が本国帰還できない理由としてまずあげられるのが、ベトナム軍の存在である。日本を含む3派連合支持国はベトナム軍の即時撤退を求め、経済援助も制限している。ベトナムは世界の最貧国の一つに数えられる国である。ベトナム戦争で傷ついた国内の再建に取り組まなければならないはずである。その国がカンブチアに軍隊を駐留させ、多額の金を注ぎ込んでいる。国際的非難を浴びて孤立し、経済援助もストップさせられるという犠牲も払っている。

なぜだろうか。ベトナムがカンブチアに軍を進めたのは、ポル・ポト軍に攻撃されたからである。ポル・ポトを排除し、隣国が反越にならないようにしなければ、安心して国内再建に取り組みない、との判断がそこにあったと思われる。現在、ヘン・サムリン、シアヌーク、ソン・サン、クメール・ルージュの中で最強の軍隊を持っているのは、ルージュと言われる。つまり、ベトナム軍が完全に撤退すれば、再びクメール・ルージュが権力を握る恐れがある。これが引きたくとも引けないベトナムの理由ではないだろうか。

ポル・ポトを恐れているのは、カンブチア人も同様、いやそれ以上であろう。国境を含めたほとんどすべてのカンブチア人にとって、ポル・ポトはベトナム以上におぞましい存在なのである。ポル・ポト派と手を組んでベトナムと戦っているソン・サン派の人々でさえ、ベトナムよりもポル・ポトが嫌いなのである。どのカンブチア人に聞いても、ポル・ポトをベトナムと比べて、同じとは言っても、ベトナムの方がいやだというものはいないぐらいである。

このポル・ポトの存在がカンブチア問題解決の大きな障害となっている。シアヌーク、ソン・サン両派がポル・ポト派と手を組んだのは、彼らの軍事力がなければ戦うことは不可能だったからである。この軍事力を支えているのは中国である。中国の支援なしでは、ゲリラ活動を続けることはできない。

(つづく)

水汲みは重し、されどまた楽し



庄司 美

ボンボコ、ボンボコ、ボンボコ、ボン、女の子たちが片手にプラスチックのバケツを、もう一方の手で木の棒を持ち、太鼓打ちよろしくリズムをとり楽しそうに道を行く。

「ビヨ、ミヤ？」(水汲み?)

「ハァー。」(うん)

ジャボレには、給水場が一家所しかない。SRWU (South Refugee Water Unit) という団体がシュベリ河からポンプで水を揚げ、薬で消毒してからパイプに通したので、人々は蛇口から水が汲めるようになっている。その給水場へ生活用水を汲みに行くのが、女の人、子供たちの日課のひとつだ。

その給水場に近い所に家がある人たちはいいのだが、遠い所では1Km以上も離れた所に住んでいる人もいて、そんな人たちにしたら水汲みは大仕事である。ある日こんな話を聞いた。子供がプラスチックポットを持って炎天下水を汲みに行く。彼はポットをいっぱいにし、暑い中一生懸命水を運んでくる。ところが、かんかん照りの中重いポットを持って遠い道のりを歩いてきたものだから、のどがからから。家に着くと思いきりその水を飲んでしまう。結局、ポットの中の水は半分程に。ちょっと聞くと滑稽なそんな話を笑い話のような口振りで話してくれたのだけれど、よくよく考えてみると、彼ら、彼女らにとったら深刻な問題である。重い、水は重いのである。水を毎日、暑い中。ソマリアの地はとにかく暑

い。遠い距離を1日に数回も運ぶのだから大変だ。家の中の水道をちょっとひねればいくらでも水が出てくるのとはわけが違う。

さて、じゃあ、私たちJVCメンバーはどうしてるかという食堂にドラム缶がひとつ置いてあり、ろばさんに給水場から運んで来てもらう。(ろばは荷車を引き、荷車の上にもドラム缶が載っている)そのドラム缶に入れてもらった水を、飲用に、洗濯用に、水浴び用につまり生活全般に使うわけである。

水浴びの時がくせもの。ドラム缶からバケツに水を汲み、ほんの数十メートル離れたシャワー室に運ぶ。身体だけの時はバケツ一杯で済むけれど、頭を洗う時は2~3回往復する。毎日それをやるだけでヒイコラ言ってしまう。そんなものだから、もともとズボラな私はすぐに「もういいや。今日は水浴びやめよう」ということになる。(きったねえなあ)

水運びとは楽ではないのだ。それなのに、人々は毎日毎日遠い人は往復2Km以上も歩いて汲みに行くのだから大変だ。大変だあ!

…とばかり思っていた。ところが、ある日気がついたのである。冒頭に書いたように、女の子たちは行きは空のバケツを太鼓にしてけこう楽しそう。それによく見ると、たいてい女の人も女の子も(男の子の場合はちょっと違うけれど)知り合い同士、あるいは近所の人同士連れ立って水汲みに出かける。

そういえば、私は知る人ぞ知る“鐘紡の社宅”で生まれ育っただけれども、その社宅では各家にお風呂がついておらず、社宅の中に1個大浴場というのがあった。その、たかが狭い社宅の中のとかがお風呂に行くのに、毎日のように隣り近所誘い合わせて行った。

「奥さん、そろそろお風呂行かへん?」「Bちゃん行くでえ」「ほな、マコちゃんとおばさんにも言うてくるわ」そしてべちゃくちゃべちゃくちゃと出かけて行くのである。

そんなことを思い出した。よく似ているのである。もとよりおしゃべりの大好きなソマリア人。もしかしたら、そうやって水汲みに歩いて行くことを楽しんでる部分もあるかもしれない。



水汲みは子どもたちの仕事

5月の動き

東京グリーンウォーク'87

5月10日(日)両国から四ツ谷まで約16km, 12の公園を結ぶチャリティ・ウォークが行われた。主催は欧米人英語教師を中心とするハンガーアクションネットワーク。昨年の山の手線一周ウォークと同様のスポンサー方式による募金集めを兼ねた催し物である。歩き手が前もって友人・家族等のスポンサーを募り、一公園歩く度に〇〇円という約束をしておき、歩き終えた後通過した公園の数に従って集金し、募金口座に振り込むというもの。

当日は、約450人の参加者が両国公園に集まり、バントマイムとゴリラの縫いぐるみに見送られ、新緑の東京へ出発した。その模様は昼のNHKニュースに流され、地元の町内会からも今後の協力の申し出があった。コースの中程にあたるJVCオフィスは休憩所として開放され、弁当を食べる人、Tシャツを買う人、会員になる人まであらわれた。神田明神大祭と重なったため多少の混乱はしたものの、これも5月の風物詩。後半の神田川沿いの道は、そよ風の快い並木道、寄りそうアベックを横目にほとんどの人が最後まで歩き通した。終了後の打ちあげパーティには、疲れにもめげず100人以上の人が参加し、映画・スライドを使っての活動報告、ロックコンサート、劇団JVCによるバントマイム劇が演じ



© 野中章弘

られ、大いに盛り上がった。

グリーンウォークを通じて集った募金は、JVCエチオピアの総合的復興プロジェクトと、PPP (People to People Partnership) を通してフィリピンの農村開発プロジェクトに送られることになっている。企画を立ててくれた人々、当日道案内等の手伝いをしてくれた人々、そしてスポンサーを募り歩いてくれた人々に心から感謝したい。

プロジェクトを通して第3世界の人々の暮しと日本の市民生活の結び手になろうとしているJVCとしては、今後こうした企画を恒例のものにしてゆきたい。市民が気軽に参加でき、共に汗を流す。そしてプロジェクトを資金的に支えてゆく、「楽しい」企画である。ウォークに限らず、企画立案を広く募集します。不器用な担当者を助けて下さい。

担当 林

東金田植え祭り

東金農場にも田植えの季節が来た。4月下旬からカラカラ天気が続いていたが、5月17日にはやっとまとまった雨が降り、絶好の田植え日和となった。

まずは古式にのっとり神主さんがお祓いをし、田の神に五穀豊饒を祈願するところから始まった。昔はこんなことをしていたのかと参加者(約25人)は神妙に聞いていたのだが、後で聞くとところによると



「田植えでこんなに大きなことはしたことがない」とのことであった。

ともかく、白いテープの張られたコース(?) に並び、うしろ向きに5列ずつ植えていった。生まれて始めて田んぼに入る者、20年ぶりに田植えをする者でとても“援農隊”にはほど遠い。最近では農家でも機械で田植えを行っているが、さすがプロのお百姓さん、私たちが1とおり植える間にもう3回目に入っている。

近所の農家の人に助けられながらも約2時間ほどで2枚分の田植えを終えることができた。ころよくおなかもすいて、農場の近くの生活クラブ生協の奥さんたちがつくったおむすびの山があっという間になくなった。次は草むしり。“援農隊”の皆さんまたお願いします。

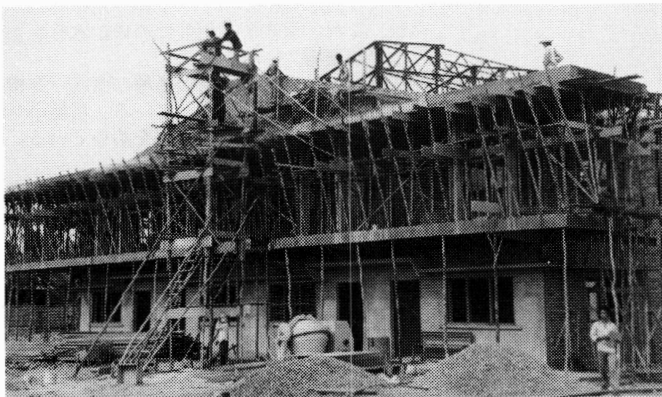
JVCプロジェクト

1987年5月25日 現在

| 活動地名 | 活動内容 | 出資団体 | 担当者 |
|-------------------|--|--|--|
| 東京本部 | <p>渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3土曜日 午後1時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)</p> | 全国社会福祉協議会 | 岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 加納 妙, 佐々木志保, 林 達雄, 前川昌代, 鶴田三芳, 古西 勇, 富安光子, 岩崎美佐子, アイネス・バスカビル |
| 神奈川県 (JVC 神奈川) | <p>神奈川県内における渉外, 事業計画, 情報収集, 資金調達等を行う。 神奈川県及び県内の市民団体との共同事業の企画, 運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション JVC説明会—毎月第1, 第3火曜日 午後6時～9時 毎月第2土曜日 午後1時～4時</p> | | 山口誠史 |
| 日本国内 | <p>●定住難民プロジェクト プロジェクトの主人公は定住難民の人々だ, という原点に立ち返り, 新しいわく組でプロジェクトを再スタートした。名称も「日本語家庭教師プロジェクト」から「定住難民プロジェクト」に変えた。活動も日本語教授だけでなく, 生活相談や, 医療, 法律, ケースワーカーにおける専門家のアドバイスをしながら, お互いの学習会, さらに定住者がより日本社会になじんでもらえるようなイベントを企画していく。</p> <p>●東金農場 60aの田植えは終わり, 畑ではトウモロコシ, さつまいもの作付を行った。菜っぱ類は地元の生協などに出荷を始めている。</p> | <p>ジャパン・タイムズ 神奈川県福祉部 横浜キワニスクラブ, 全国老人クラブ連合会</p> | 山口誠史, 他約60人 |
| エチオピア (ウォロ州) | <p>●総合的復興促進</p> <ol style="list-style-type: none"> 種子銀行 食糧用穀物と種子の交換により34tの大麦を確保し, 3月より貸し出しを開始した。 植林 ツルテ川上流に100haの水土保全用植林地が認められ, これと家庭植林用のために苗木を生産中。 モデル農場 アグロフォレストリー用の樹種の育成, 有機農業牧草実験等を継続して行っている。現地小学校の農業クラスを受け持ち, 授業を始めている。 保健・栄養 第2回目の母子教室を開講中。家庭訪問による家庭菜園の奨励も行っている。 井戸, 給水 マーシャ村に深井戸を2基掘る作業が現地政府の機関の協力のもとに終了した。 チェック・ダム(砂防ダム)建設 フード・フォー・ワークによりチェック・ダムを建設している。 | <p>CRDA, 西本願寺, チャリティ・カレンダー, チャリティ・サイクル, メリノール修道士会, 全国老人クラブ連合会, バンド・エイド, 日本漫画会協会, 東京グリーン・ウォーク</p> | 内山田 康, 伊藤達男, 伊藤幸子, 久田信一郎, 有本敦子, イエットベルク, ソロモン, バレタ, フェテルワルク, ダニエル |

| 活動地名 | 活動内容 | 出資団体 | 担当者 |
|--|--|---|---|
| ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) | ソマリア全体が再び干ばつに見舞われている。昨年10～11月にかけての小雨季に例年ほどの雨が降らず、加えて今年3月からの雨季も遅れているためだ。国連機関とソマリア政府の調査によると、ソマリア全18郡のうち12郡が深刻であるという。すでに国連機関やNGOが緊急救援に入っている。 ●農業による自立促進 ルーク地区も雨季の到来が遅れ、穀類の種まきができないでいた。しかし5月23日に大雨が降り、洪水により水路やポンプに被害を受けたものの、1カ月遅れの作付が可能となった。一方、農場の拡張工事は最後の追い込みに入っている。 ●コミュニティサービス/収入プロジェクト 約3カ月間の調査をもとに最終的な検討を加えている。 | UNHCR, R.I. ジャパン, 創価学会文化・ 平和運動事務局 | 嶋 紀晶, シアッド, 荻ノ迫善六, 船川秀夫, 中岡哲也, 青井千恵, マーシャ石井, モハメッド, ラシッド, ハジ, アオキ, アブディ ・ジョフ, フセイン, ア ハメッド, ハッサン |
| ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡) | マグドール・キャンプ時代からこの新難民に食糧援助をしてきた SRCS (サウジアラビアの団体) が NRC (ソマリア政府の難民局) に働きかけ、JVC に代って医療プロジェクトも実施したいと JVC に通達してきた。現場での協議を重ね、JVC の建設した施設も含めて SRCS に引き継ぐことにした。その他のプロジェクトも再考中である。 | 朝日新聞厚生文 化事業団 | 浜野敏子, 米澤 聡, 庄司 美, シュクリ, ハッサン, アブディ, シュイク・アブディ |
| カンブチア (プノンペン カンダール省 プレイベン省 スバイリエン省) | ●カンブチアの人々への総合的人道援助 建築中の救援のためのワークショップ/技術学校は7月11日に落成式を予定している。 86年11月中にユニセフ・プノンペンと補助栄養給食プログラムにおける協力を合意。看護婦(マリー・キャマル)が到着。調査と交渉を開始した。プノンペン市に芝刈り機, ゴミ箱用の資材を提供。OXFAM と共同で井戸掘りも行っている。 1. 救援のためのワークショップ/技術学校 6月中に建築完了。7月11日落成式。 各支援団体の訪問を申請中。 2. 井戸掘り/給水 プレイベン省・スバイリエン省で継続中 (OXFAM と共同) 3. プレック・ピノウ孤児院援助 男子用宿舎, 手工芸室, 浴室の補修・建設完成。 トンレサップ川からの水浄化システムを計画中。 4. 補助栄養給食 1987年度から UNICEF と共同で栄養不良の子どもたちを対象に行う。プノンペン市内 RINE センター活動に協力。 | 日本青年会議所, 関東地区協議会, 国際平和基金, 全国老人クラブ 連合会, 創価学会文化平 和運動事務局, モラロジー MIRC, 立正佼成会, 自動車労連, 庭野平和財団, ILC チャリティ グループ, 西本願寺, 善興寺ダーナ基 金, 高岡青年僧侶会 | 熊岡路矢, 簗田健一, 簗田玲子, 馬 清, マリー・キャマル |

落成間近のカンブチアの技術学校



| 活動地名 | 活動内容 | 出資団体 | 担当者 |
|-------------------------------------|---|---|--|
| タイ バンコク事務所 | 渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, バザー, 古本のセール。季刊「ニュース・レター」(英語・タイ語)発行。 | 全国社会福祉協議会 | ボンビモン・チャイブーン, 柴田久史, カモン・ミンムアン, クリッサダ・タウイパサ |
| カオイダ (カンブチア 難民キャンプ) | ●西崎憲司記念技術学校 キャンプ内の生活に対する制約は徐々に厳しくなっている。ブラック・マーケットへのしめつけや救援団体によるプロジェクト機材の持ち込みにも複雑な手続きが必要になった。現在の生徒数は639人。 | UNHCR R.I. ジャパン | 矢野和貴, 谷山博史, ソムヨット・ラタナタム, パイトゥーン・チマチュイ |
| 国境のサイト2, ノンチャン (カンブチア 難民村) | ●補助給食 妊産婦, 乳幼児を対象に, 栄養教育, ドライパックの配給をしている。また週一回はライ病, 結核患者にもドライパックを支給している。 4月後半には妊産婦のスクリーニングが実施され, 683人が登録された。 結核患者, 栄養不良児やその母親, 託児所の子供たちには食事の配給も行われている。 | WFP/UNBRO | テリース, ブーム, チャンチャイ, トンバイ, スピチャ, 北代りり, ソムサック, カレン, エツ, 前野博美 |
| バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設) | ●文化オリエンテーション ・日本定住予定者 ①日本語学習の基礎(読み, 書き, 聞き取り) ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ・日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深める。 ●子供レクリエーション・プログラム 一般生活常識を通して自然科学の基礎を教える。 | 天理教千葉 | 石原淑子, 落合正幸, アナン・ブッタミリンパ ティ, ウィパ・ロンブル |
| 地域開発 (バンコク市内の スラム地区) | ●奨学金援助 スラム在住児童が小学校(6年間)を卒業できるよう援助している。本年度の対象者は10のスラムで16校250人。 ●クロントイ図書館 クロントイスラム住民の就学前児童から成人までを対象としている。12区における新図書館建設のため, NHA(住宅公社)と交渉中。 ●移動図書 ラプレー, ナンシーのスラムで子供向け図書を中心に回覧。 ●移動学習センター(プラティープ財団, FFSC, JSRCとの共同プロジェクト) 9のスラムで学習の機会のない子供たちのため人形劇などで教育を行っている。 ●再定住 ラッカバン地区において再定住したバンコク市内のスラムの人たちへの資材援助(長期資金貸与方式)。 | モラロジーMIRC, NTV, JOFIC, 庭野平和財団, 京都国際青年委 員会 | ヴァラナート・チェンクン, サムルアイ・ジョンヨー クラン, アルニー・スニ ットムンヴァイ, リーラ ・クンナロン, スワン・ リンサムバン, コメン・ スンサマラヤ, 柴田久寿子 |
| 人材派遣プロジェクト | | | |
| フィリピン (PFAC, パラワン島) | ●国際移民委員会(ICM)一第三国定住手続きにともなう医療業務及びキャンプ内でのプライマリ・ヘルスケア。 | 城西病院 | 石井弘代 |

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援 (金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
 (住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

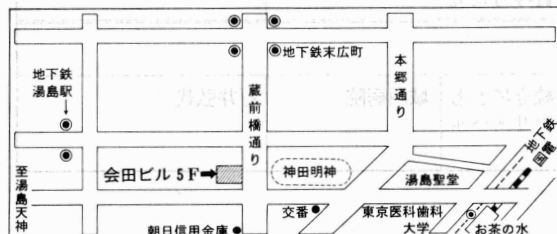
- A. アフリカ難民救済募金 (5月小計 10,000円) アフリカの難民・飢餓民への救済プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (5月小計 38,400円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救済募金 (5月小計 2,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンプチア募金 (5月小計 52,000円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- E. スラム募金 (5月小計 8,500円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. デッグ・スラム奨学金・募金 (5月小計 181,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. 定住難民募金 (5月小計 4,300円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- H. JVC運営経費募金 (5月小計 50,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- I. 無指定募金 (5月小計 174,644円)

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- 東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)
- 加入者名—JVC 東京事務所

編集後記

▶熱帯林問題を特集に取り上げたのはいいが、この問題の多様性と複雑さに立ち往生してしまった。まるで密林の中に入りこみ、出口がわからなくなってしまったようなものだ。それがなんとか出口まで来ることができたのは熱帯林行動ネットワークの皆さん、黒田さんのおかげである。木材の流通機構については木材輸入協会の松木さんや東和木材の井上さんに詳しく教えていただいたし、日商岩井の藤原さん、好宮さんにも企業秘密(?)の一端を披露していただいた。まだまだ食い足りない部分が多いが、次の機会にはもっとつっこんだものにしたい。ともかく皆さんのおかげでできたこの70号、紙くずとにならないことを祈りたい。



昭和62年 6月20日発行 (毎月20日発行)

編集人 前川 昌代
 発行人 星野 昌子
 発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
 〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
 ☎03(834)2388 Telex:2323187 JVCHQ J

バンコク事務所 JVC THAILAND
 29/3 Soi Saengchan, Sukhumvit40,
 Rama 4 Road, Bangkok 10110.
 ☎391-1117

ソマリア事務所 JVC SOMALIA
 c/o UNHCR P.O. Box 2925
 Mogadishu,
 Telex:794 HICOMREF SM

エチオピア JVC ETHIOPIA
 事務所 P.O. Box 6941 Addis Ababa

カンブチア JVC KAMPUCHEA
 事務所 203 Monorom Hotel Phnom Penh
 Letter:c/o ICRC, P.O. Box 11-1492
 Bangkok.

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共300円